

法政大学学術機関リポジトリ  
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

## 再帰的創造性の生活思想

著者	田中 研之輔
出版者	法政大学キャリアデザイン学会
雑誌名	生涯学習とキャリアデザイン
巻	6
ページ	207-214
発行年	2009-02
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/6735">http://hdl.handle.net/10114/6735</a>

# 再帰的創造性の生活思想

法政大学キャリアデザイン学部専任講師 田中 研之輔

## 1. 「個を蝕む時代」の処方箋

2007年秋口に噴出したサブプライムローン問題を皮切りにして、さらに、2008年9月15日に連邦破産法第11条の適用を申請し経営破綻した米投資銀行リーマン・ブラザーズの破綻処理を発端にした金融不況は、「戦後最悪」「百年に一度」と喧伝されるグローバルな〈社会問題〉となっている。このグローバルな金融機能の連鎖的破綻がすでに深刻なまでに実体経済に影響を及ぼしていることは各種メディアでかまびすしく議論されている。ここで金融問題・経済問題ではなくグローバルな〈社会問題〉として認識する意図は、金融危機が瞬間に実体経済の機能不全を引き起こしているだけでなく、実体経済の機能不全がこれまたすぐさまに、人々の暮らしの領域に直結する生活の存立基盤や生活構造を急速なまでに脅かし始めているという事態の深刻さと急激な変化から目を逸らさないようにするためである。

グローバル金融・経済危機によって引き起こされた（より正確な意味では、グローバル金融・経済危機によって顕在化した）問題のなかでとりわけ深刻な社会問題として連日取り上げられているのは、新自由主義政策下の「規制緩和」「民営化」「市場の活性化・自由化」の企業側の積極的受け入れにより激増した契約社員や派遣労働者といった非正規雇用という雇用形態で労働に従事するプレカリアート層の「切り捨て（派遣切り・雇用契約の打ち切り等）」である。彼ら・彼女らは、金

融業界の意思決定にはまったく関与することのない労働者達である。こうした事態に直面し、まずもって早急に取り組まれるべきは、人間の根源的な権利である「食と住」の環境確保である。

昨年12月以降、厚生労働省を中心に迅速に取り組まれている緊急雇用対策（「住宅喪失者支援・採用内定を取り消された学生等への就職支援・派遣労働者支援・派遣・期間工外国人労働者支援」等は、継続的かつ柔軟に多様な支援策として施行されねばならない<sup>(1)</sup>）。12月19日に経済対策閣僚会議でまとめられた「生活防衛のための緊急対策」に提示された雇用対策・雇用創出のための地方交付税増額・内需経済を促進するための税制改正などは、緊急に求められている実践的政策の施行である。また、こうした緊急支援政策からは零れおちる社会層の路上レベルでの「（一時的な）住居確保」「炊き出しによる食の確保」などは、どれだけのボランティアな主体を動員しても到底充足しないほど、〈需要〉が増している。

グローバル金融危機下でいまわれわれが直面しているのは、労働者階級における（プロレタリアートが権利闘争を続けてきた）「労働の搾取」という問題で捉えることのできる類のものではなくて、90年代後半に度々問題視されてきた労働の手前あるいは外部へと「社会的に排除される社会層の激増」という大規模で急激な構造的移行の歴史的過程である。とりわけ、2008年12月以降迎えているのは、社会的排除の「強度」と「性質」の変化である。たとえば、90年代後半に社会的排除の

対象として取り上げられてきた若年滞留層の歴史的経緯をみてみるとその変化に気づかされることになる<sup>(2)</sup>。90年代初期には、「自分らしい」生活を求める積極的なライフデザイン論として「(初期)フリーター」が着目された。その後、労働市場の再編による非正規雇用の激増と市場の停滞にともない、半ば、構造的に強いられる90年代後半の「(中期)フリーター」問題を生み出してきた。このときの「(中期)フリーター」問題が、労働現場での搾取ではなく、(正規)労働の〈外部〉に佇む社会的な排除の問題と密接にリンクしてきた。これまでの若年滞留層をめぐる問題は、とくに、「労働」をめぐる社会的な権利からの排除が問題視されてきた。だが、2008年以降のグローバル金融危機以降の若年滞留層の問題は、「非正規労働」の問題から「ネットカフェ難民／若年野宿者」問題の〈住〉環境をめぐる問題へと、つまり、労働をめぐる問題から「生存」をめぐる権利闘争へと問題の質とその深刻度が深化してきているのである。

若年滞留層をめぐる社会的境遇にみてとれるのは、ライフデザインを牽引した「個の時代」から、不安定や不透明をこえて個の生活と生存を脅かす「個を蝕む時代」の到来である。不透明・不安定な時代で起きていることは、社会システム再編への必死な喘ぎに対応できない意思決定の埒外にいる社会層の「切り捨て」というあまりに露骨な胎動である<sup>(3)</sup>。本論を少しばかり先取りすることになるが、この「個を蝕む時代」の実践的処方箋として、再帰的創造性[Reflexive Creativity]の生活思想という視座を提示したい。

## 2. 関係論的思考：界・ハビトゥス・資本

社会構造的な歴史的変化に直面した「個を蝕む時代」に、個という主体でもって対応していくことを主張するのであれば、再び、無謀な自己責任論へと舞い戻ってしまう。ここで必要なのは、構造と主体を取り結ぶ状況変動的な分析枠組みであり、集合レベルで対応できる実践的な思想である<sup>(4)</sup>。本論文では、このような実践的思想を可能にする

認識論的な分析枠組みとして、理論的抽象化と経験的具体性とを行き来させ、〈社会問題〉の生成要因(歴史的・社会的諸条件の分析に適し)やそれへの対処法を捻出する、関係論的思考法を提示する。ここで関係論的思考とは、社会学者のピエール・ブルデューが提唱しているそれを念頭に置いている。具体的には、界・ハビトゥス・資本といった理論的道具を用いて、①(たとえば、「フリーター」論、「非正規雇用」論が陥っている恣意的に境界を定められた母集団をもとに、実体論的に思考・分析する方法に対して)「関係の束からなる空間の形式」(RS,p.283)として関係論的に指向することを目指すものであり、②(構造もしくは行為主体、システムもしくは行為者、集団もしくは個人のいずれかに存在論的優先性を置く)方法論的一元論に対して、「関係性というもの」の優先性」(RS,p.34)を主張する認識論的根拠に基づくものである。

それでは、理論的道具となる界・ハビトゥス・資本とその関係性について概説しておこう。界というのは、それぞれに相対的自律性をもった、客観的諸力によって構造化される体系であり、その界に参与する行為者のすべてに行使される位置取りの権力関係(あるいは、位置の間の客観的諸関係のネットワーク)(RS,p.131)を備えた関係論的布置構造である(RS,p.36)。ブルデューは、界という概念装置を用いて「社会的世界に存在するのは、関係であり、行為者同士の相互行為でも間主観的な結びつきでもなく、マルクスがいったように、「個人の意識や意志からは独立して」存在する客観的諸関係」(RS,p.131)<sup>(5)</sup>であると述べる。

界を理解するために、ブルデューは、ゲームとのアナロジーを述べる。界はゲームのように考案されて構築されたものではないが、なんらかの〈規則性〉によって動いており、それらの〈規則性〉に基づく独特なメカニズムで動いている。「界には本質においてプレイヤーどうしの競争の産物であるような賭け金があり、つまり、それは、ゲームへの投資、イリュージョン(illusio)がある。」

(RS,p.133)。プレイヤーが次第にゲームに没入し、激しく対立するのは、プレイヤーたちが共通してゲームにもその賭け金にもひとつの信念＝信仰（ドクサ）に加担しているがゆえに、ゲームやゲームへの投資（イリュージョン）、賭け金を問題視することができない。

この指摘は、本論文で提示する再帰的創造性の生活思想においてきわめて重要な示唆を提示する。まず、社会的行為者とは、「ゲームの中のプレイヤーであり」、言い換えるなら、何らかの構築された規則性に従い、己をゲームへと投資する主体であると。そこで、社会的行為者であるプレイヤーたちがどのようなゲームに参加し／どのような界に参与し、いかなるドクサを共有しているのか、また、そのゲームやゲームへの投資はいかなるものであるのか。この問いに答えていく視座を提示していくことが、「個を蝕む時代」の実践的な対応策となりうると考える。しかしながら、そもそも人々は相対的に自律した界のなかで構築される規則性にどうして従うことになるのか。強固で不偏な諸構造が社会行為を強制するわけでもないのに、いかなるメカニズムが社会的行為に規則性を生み出すことになるのか（RS,p.38）。この点を答えることになるのが、ハビトゥスである。ハビトゥスとは、それ自体世界の内在的規則性と傾向性とを身体化した産物（RS,p.181）であり、また、それは、ある界、あるいは部分的にオーバーラップする複数の会の内在的必然性が身体化された産物である（RS,p.169）。

ブルデューは、「社会的行為者が規則に従うのは、規則に従った方が従わなかった場合よりも得[＝利益]になるからだ」（RS,p.153）というウェーバーの言葉からこの規則を有効にしているものは何かという問いをたてる。この答えは、イリュージョンであり、別の言い方で述べるならば、社会的行為者の活動が力学的な原因や効率最大化の自覚的意図とは異なった原理を持っているにもかかわらず、ある内在的な経済的論理に従っていて」（RS,p.159）、純粋な意味での経済的な理性には還元できない内在的な理性によって構成されている

ということである。この内在的理性にあたるのが、界と資本の概念を媒介させるハビトゥスなのである。

概念としてのハビトゥスは、単に個人と社会との対立、方法論的個人主義と集団主義あるいは、全体論といった「社会科学の恣意的な二分法」<sup>(6)</sup>を打開するだけでなく、「個人的なもの、個性的なもの、そして、主観的なものさえもが、社会的、集合的だと主張すること」（RS,p.167）であり、いわば、「社会化された主観性」として理解されるものである。

界とハビトゥスの関係性は、「界はハビトゥスを構造化する」ものであり、ハビトゥスは、「ある界あるいは部分的にオーバーラップする複数の界の内在的必然性が身体化された産物であるとする」（RS,p.168-169）。そこで界とハビトゥスとのこのような関係性を理解した上で、便宜的に次の二つの位相を想定することができるであろう。第一に、「ハビトゥスとそのハビトゥスを生み出した社会的世界」（RS,p.169）<sup>(7)</sup>に遭遇する場合である。ここで考えられるのが、①社会階級・社会階層の単純な再生産論と②経済的合理性に還元しうる社会的行為である。だが、これに相反する次元、つまり、第二に、「ハビトゥスとそのハビトゥスを生み出した社会的世界とは異なる社会的世界に」に遭遇する場合である。ここでは、①社会階級・社会階層の（とりわけ、急激な）上昇移動あるいは下降移動（意図的でない場合の〈社会的滞留〉を含める）をもたらす場合と②経済的合理性に還元しえない社会的行為である。

とくにこの2点目において、概念としてのハビトゥスの存在意義がある。具体的には、「社会的行為者が固有の意味で合理的ではない、つまり用いる手段の収益率を最大化するように行動を組み立てるわけでも、目標を達成するために使える手段をはっきり考案するわけでも、術策を弄したり計画を立てたりするわけでもないのに理になっ

もない場合」(RS,p.172)である。

このとき、「構造がハビトゥスを生み出し、ハビトゥスが実践を決定し、実践が構造を再生産する」(RS,p.178)という、決定論的な図式「つまり構造内での位置が社会的戦略を直接的に規定するという図式をハビトゥスは打破しようとしているところは看過されてはならない。この点と関連して、界とゲームとは決定的に異なっていることがある。それは、界において社会的行為者は、さまざまな資本の蓄積ならびに資本の変換率を変化させることで、界を成り立たせている〈規則性〉を戦略的に変えていくことができるという点である<sup>(8)</sup>。

「個の時代」から「個を蝕む時代」への社会的歴史的变化のなかで、ハビトゥスという概念の活動領域が以前よりも広がりを見せているように思われる。たとえば、都市という社会で確認できる階級と空間の分極化・二極化は、一方で、社会階級・階層の急激な（あるいは、突発的なとも表現しうる）上昇移動を可能にし「クリエイティブ・クラス」を生み出し、他方では、急激な下降移動を強いられる非正規雇用・不安定就労層などの「プレカリアート」を生み出している。これはどちらの場合においても（当然のことながら、問題になるのは、後者の場合であるのだが）「ハビトゥスとそのハビトゥスを生み出した社会的世界とは異なる社会的世界」に遭遇する機会を増やしているのである。と同時に、ハビトゥスという概念を用いることで、こうした状況下で合理的行為理論では救い切れない社会的行為者の経済行動の現実的論理に迫ることができる (RS,p.174)。

より具体的に、界という概念装置を導入する際に、つまり、関係論的思考を駆動させるうえで不可欠なのが、「(多元的)資本」と「(身体化された歴史としての)ハビトゥス」である。ここで「資本」とは、通常想定される「経済資本」のみではなくて、「文化資本」と「社会関係資本」である<sup>(9)</sup>。文化資本には、「①身体化された形式、②客観化された形式、③制度化された形式」(RS,p.158)から構成されるものであり、社会関係資本は、「顕在的あるいは潜在的な資源の総和

であり、程度の差はあるものの、制度化された人間関係、互いに面識があり会釈し合う関係の持続的なネットワークを有している個人や集団が手に入れることのできるものである資本や権力の総和」(RS,p.158)である。ちなみに、界の内部の不平等や格差とは、この資本のヒエラルヒー、さらには、資本の総和によってそれぞれに影響を受けるものである。

関係論的思考を支える界・資本・ハビトゥスという認識枠組を用いると、実践的なレベルでの具体的な対応がみえてくる。まず、自己のアイデンティティに関する心理学的な分析、あるいは、他者のキャリアヒストリーから学ぶ個人史的分析に加えて、「資本」の客観的分析と（多元的）資本の戦略的蓄積・転換に向けて、関係論的思考を身につけていくことである。こうした理論的視座に立つことで、自己啓発イデオログに啓蒙されることなく、また、悲鳴をあげる「個」のカウンセリング的処方の手前にとどまることを可能にする。

### 3. 生活思想の〈貧困〉からの脱却

さて、関係論的思考の理論的道具—界・ハビトゥス・資本—を確認するのに、やや抽象的に展開してきた議論を今一度、経験的でアクチュアルな問題へと接続させていきたい。今日の状況でいえば、本論の冒頭で確認したように、劣悪な生活環境を強いられることになった人々には手厚く適切なサポートが早急に求められる。緊急雇用支援と住宅確保、つまりは、経済政策と社会福祉政策による総合的な緊急支援策が求められている、このことは疑いない。また、その一方で、「金融危機パニック」が、各種メディアの過剰・加熱報道により、社会不安や生存基盤の喪失が根源的に崩されていくというような道徳レベルでの日常的不安として新種の「モラル・パニック」を引き起こしつつあることもまた事実である。だが、一方で、具体的な問題への実質的な対応と、もう一方で、社会不信・不安という感覚的なレベルでの変容のなかで、もうひとつ見落とされてはならないきわ

めて重要な問題の位相があると考ええる。それは、今回のグローバル金融危機でみえかくれする「生活思想の〈貧困〉（より詳しくは、生活思想の〈貧困〉が特定の社会層において集中的にみられる）」という問題である。

不透明・不安定な時代を生き抜いていくために必要な人生設計に必要な「資本」の不足である。ここで通常問題視されるのは、生活の物質的維持に必要な「経済資本」の不足である。「経済資本」の不足や緊急事態における窮乏化には、その次元での対応がなされなければならない。ここで問題視したいのは、ブルデューが提示している残りの資本である「社会関係資本」と「文化資本」の蓄積不足や不均等配分という事態である。とくに、非正規雇用・不安定就労層に深刻にみられるのは、「経済資本」の不足以上に、連帯し劣悪な状況から抜け出すときに不可欠なネットワークを構築することのできる「社会関係資本」と戦略立てて自己の〈資本〉を蓄積・転換していく際に必要な「文化資本」の不足である。つまり、経済資本だけでなく、社会関係資本と文化資本の総合的不足が、生活思想の〈貧困〉の問題として露呈されることになるのだ。

生活思想の〈貧困〉からの脱却に向けては、ひとまず、次のようなことが想定されよう。たとえば、第一に、現存する超高度資本主義のライフスタイルと袂を分かち、人間として最低限の生活を取り戻していくことである。あるいは、第二に、もっと積極的な意味で、資本主義体制の中で、新たな文化的な「経済活動」を生み出していくことである。ここで文化的活動の経済資本還元率を早急に求めるのは得策ではない。だが、文化的活動それ自体に、生活思想の〈貧困〉には陥らない活力が生成されることになる。こうした方向性は、ジグムント・バウマンが、ソースタイン・ヴェブレンを引き合いにして再主張したように、「労働倫理を〈職人〉の倫理」へと置き換えることにつながるものである。人類とは、そもそもにおいて創造的存在であり、〈職人〉の倫理とは、近代資本主義社会で形成され、確立された労働倫理が

否定した、尊厳や社会的に承認されることの意義を取り戻すことを可能にするものである（バウマン、2008、225-226）。こうしたバウマンの指摘は、ユートピア的労働倫理に基づいているものであり、今日の社会状況においては説得性を持ちえる確率がかなり低いものであることは否めない。けれども、いずれにしても、受動的で従順な行為者とは異なる価値を日々の生活の中に取り戻すことができる生活思想の根幹をなす労働観として不可欠なものである。

グローバル金融危機の構造的連鎖により雇用契約を打ち切られた（新たな）プレカリアート層や若年滞留層においても、経済資本へと転換するための社会関係資本や文化資本の戦略的蓄積が鍵となる。というのも、非正規雇用者の絶対的・相対的增加や、今回のようなグローバルな経済危機下の「弱者の使い捨て」は、たとえ、この先、「規制緩和」から「規制強化」へと「雇用の再編」が押し進められても、今後も性質や強度をかえて起こりうることを想像するに難くないからだ。むしろ、社会関係資本は、蓄積していく段階ですでに「不平等」を抱えているし、文化資本も、家庭間の格差が露骨にあることはすでに知られている。だが、失業という極限的なケースに絶えず脅かされ、生活の時間的構造が失われ、いわば、「生活の破壊」（ブルデュー、2000、134）を強いられる社会層であるプレカリアート<sup>(10)</sup>としてその格差や不平等の再生産のメカニズムに従順な主体でいなければならないということはない。まず、集合的な実践として、政府や企業に対して、「声」をあげ、権利を主張していく。さらには、インターネット環境の確保による情報収集、書店等を利用した知識の収集、など、日々の行動のなかで取り組んでいく。生活思想の〈貧困〉の状態から抜け出すための機会は、あらゆる人々に開かれてなければならない。にもかかわらず、生活思想の〈貧困〉の守備範囲を主体自ら決め込んでしまっているようにみえてならない。若年滞留層・滞留予備層にとって問題なのは、その状態の再生産に無自覚に加担してしまうこと、さらには、経済的困窮

のなかで生きていくことの創造的模索をやめてしまうことだ。

「生活思想の〈貧困〉」とは、個人レベル、自己責任論にはけっして還元しえない、特定の社会階層に集中する集合的な問題である。危機を生み出す構造レベルの社会歴史的分析とその弊害を最も直接的に被る社会的弱者の「生活思想の〈貧困〉」を現実視し、対象化し、問題化した上で乗り越えていくような実践的な処方箋が求められている。

#### 4. 再帰的創造性の生活思想

「個の時代」にしばしば主張されてきた（いまだに自己啓発本で主張されている）のは、個人としての付加価値の創出、新たな経済・文化・社会領域における創造性[creativity]である。ここでは、こうした創造性の思想を受容する人間ではなく、創造性の必要性の主張者の立場性の問題を指摘したい。〈素朴〉創造性擁護論者は、サルトルの「独創的な（最初の）企て」の二番煎じであり、創造性を自由かつ自覚的な自己創造の行為であるとう進化論的な目的論ときわめて近い立場に立つ。しかし、今、迎えている「個を蝕む時代」においては、自己目的的な創造性の主張がいかに「知識人独自の特権的な立場から発せられる擁護論」(RS,p.176)であるかが自明であろう。そうであるので、創造性の主張者は、まず、この創造性の虚構性に反省的でなければならない。

まず、出発点として〈創造性〉を希求する社会的・歴史的困難性を認め、そうした環境を生み出している社会的条件・状態に、その時々で確かな分析を加えていく必要がある。その試みは、サルトル的な創造性論とは袂を分かち、再帰的な創造性とよびうるものである。再帰的創造性の生活思想を実現していくのには、①界の客観的な構造分析、界の〈規則性〉を変えていくために②（多元的）資本の戦略的蓄積・変換可能性を分析し、それらを可能にするために、③社会化された主観性である「ハビトゥス」を再帰的に分析していくことが鍵になってくる。ここで再帰的創造性の生活思想の認識論的土台の構築に向け、ブルデュー

が再帰的社会学の実践に向けて提示している次の4点を確認しておくのもいいだろう。①各専門領域の〈プロ職人〉から〈技〉を習得し、独自の〈ヴィドゲンシュタインが用いる意味での〉「思考の道具」を身体化させていくこと。②理論的抽象化と経験的具体性をたえず、往還させる関係論的思考を獲得し、さらには、洗練化させていくこと。③日常空間において誰しもが「あたりまえ」と思っている事柄（共通感覚(常識)・信念／信仰(ドクサ))を徹底的に懐疑していくこと。そして最後に④他領域の専門理論から柔軟な実践理論を構築していく隣接領域横断性の積極的に活用していくことである。

「個の時代」は、「個を蝕む時代」へと変容を遂げている。こうした歴史的転換期に「個」で立ち向かわないこと、関係論的思考をもとに集合的に戦略づけて資本蓄積・転換を企てていくこと、再帰的創造性の生活思想という日常空間再編に向けた思想的実践が「個を蝕む時代」を生き抜いていく処方箋の切り札となるに違いない<sup>(11)</sup>。

#### 注

(1) グローバル金融不況の対応策としての緊急雇用支援策については、厚生労働省HP (<http://www.mhlw.go.jp/bunya/koyou/naitei/index.html>) を参照した。

(2) 若年滞留層の社会的排除については、拙稿2007に詳しい。

(3) こうした急激な社会構造的変化を前にしてまず、確認されねばならないことは、①キャリアデザインがもっとも困難な時代に直面しているという歴史的認識である。労働の現場だけでなく、生活を豊かにしていく」という理念として導入されているキャリアデザインとは、戦後日本社会という時期区分で捉えられるとき、もっとも実践困難な状況を迎えているということに自覚的・反省的でなければならない。しかし、第二に、だからといって人生設計をしていくことに悲観的になるだけでなく、キャリアデザインが最も困難な時代であるという「キャリアデザインの現代的逆説性」の上に、実践的な処方箋として、柔軟なキャリアデザ

インが構想されなければならない。本論文の認識論的基礎にして、筆者は現在、リフレクシブ・キャリアデザイン（論）の構想に取り組んでいる。

（４）ここでの実践的な思想とは、不況時になると売り上げがあがるといわれる自己啓発本の中心的テーマである安心・確実・着実な生活を手に入れるためのキャリアアップ・スキルアップを促す「自己啓発イデオログ」とは袂を分かつものである。自己啓発本によって人々の生活への意欲が鼓舞されること自体、頭ごなしに批判される社会的行為ではない。しかし、①キャリアアップ・スキルアップを求めることのできる人を前提にした議論であること（冒頭で触れた社会的排除から生存の権利闘争へと立たされた若年滞留層は、このような自己啓発イデオログの埒外にいるといっても過言でもない）。さらに、②キャリアアップ・スキルアップを煽る自己啓発イデオログは、勝ち組・負け組論理の帰結として不可避である自己責任論に裏付けられたものである。

（５）ピエール・ブルデュー 水島和則訳『リフレクシブ・ソシオロジーへの招待』藤原書店。以降、本書を便宜的にRSと表記する。

（６）理論レベルでは、①認識の反省性（Epistemic Reflexivity）として、たとえば、個人／社会、客観主義／主観主義、機械論／目的論、意識／無意識、身体／精神［デカルト的存在論の二元論批判］、身体的なもの／言語的なもの、構造的必然性／行為者としての個人というような社会科学に蔓延る恣意的な二分法を打破する視座を提示する。

（７）ハビトゥスがそのハビトゥスを生み出した社会的世界と出会う場合という想定は、ブルデュー自身が批判する実体論的思考法に限りなく近いものであるといえるだろう。ハビトゥスという概念を実体論的なカテゴリーへと落とし込むのではなく、概念自体曖昧性を持っている、だが、それゆえ、生成論的な理論道具として実践的な可能性をもつものとして理解しておくことがさしあたり、重要なだと述べておきたい。

（８）界それ自体を変えていくことができると考えるのではなく、界の内部の権力関係、ヒエラルヒー、いわば、界の中身である「質」を変えていくことができる理解しておく。

（９）ブルデューの「（多面的）資本論」のなかで「経済資本」「社会関係資本」「文化資本」に加えてこれらいずれの資本もとりの形態であり、かつ、中核的な役割を占めている（そのために、最も複雑な概念である）のが「象徴資本」である。

（１０）プロレタリアートは、構想された未来を見据え現在をかえていく野心を抱くために必要な最低限の（生活の）保障や安全性を享受しているが、そうであるがゆえに、守るべき何か、失うべき何かを、仕事（たとえ、過酷で低賃金の仕事であっても）を持っており、彼らは、下層プロレタリアートに転落することの恐怖ゆえに保守的にならざるおえない社会的存在である（ブルデュー、2000、137）。ブルデューは、プロレタリアに対して、下層（サブ）プロレタリアという社会層を対峙させているが、不安定就労やフレキシブルな雇用形態下（もちろん、特に低所得労働者であるが）で働く労働者のことを指しており、本稿ではプレカリアートという言葉を用いる。

（１１）再帰的創造性の生活思想とは、関係論的思考をより経験的な課題へとつぎ合わせていくこと、さらに、理論的枠組みと経験的レベルの問題との交渉作業を通じて、社会的行為者としての（ブルデューが述べるところの）「戦略（目的に対して客観的に指向された行為であるが、その目的とは主観的に追及された目的でなくてもいいもの）（ブルデュー、1994、p.152）」について議論を深めていく作業でもある。

## 参考文献

- Bourdieu,P., Chamboredon,J., Passeron,J., 1973, *Le Métier de Sociologue*, École Pratique des Hautes Études and Mouton & Co. (=1994、田原音和・水島和則『社会学者のメチエー認識論上の前提条件』藤原書店。)
- Bourdieu,P., 1977, *Algérie 60:structures économiques et structures temporelles* (=1993、原山哲訳『資本主義のハビトゥス』藤原書店。)
- Bourdieu,P., 1979, *La Distinction: Critique Sociale du Jugement*, Éditions du Minuit. (=1990、石井洋二郎訳『ディスタンクシオンⅠ・Ⅱ』藤原書店。)



Bourdieu,P., 1987, *Choses dites*, les Editions de Minuit. (=1991、石崎晴己訳『構造と実践』藤原書店。)

Bourdieu,P., 1980, *Questions de Sociologie*, Editions de Minuit. (=1991、田原音和監訳『社会学の社会学』藤原書店。)

Bourdieu,p., and Wacquant,L, *Reponses. Pour une anthropologie reflexive* (=2007、水島和則訳

『リフレキシブ・ソシオロジーへの招待：ブルデュー、社会学を語る』藤原書店。)

Bourdieu,P., *Contre-Feux, Propos pour servir a la resistance contre l'invasion neo-liberale*, les editions du Seuil, Paris. (=2000、加藤晴久『市場独裁主義批判』藤原書店。)

田中研之輔 2007「若年滞留層の社会的排除」『地域社会学年報』第19号：pp. 51-71.